

祭文

八田與一命は我が国の統治から離れて六十年に垂んとする台湾の地において、今尚住民等の敬愛を受け給ふ偉人にして日台心の絆の象徴なり。

顧みれば八田與一命は明治十九年二月二十一日、父八田四郎兵衛、母サトの五男として石川県河北郡今町村に生を享け、第四高等学校を経て同四十三年、東京帝国大学工科大学土木課を卒業し、台湾総督府土木部に奉職され、大正三年、土木技師に昇任、台湾島内の近代建設上緊要なりし衛生工事、発電工事、灌漑工事の諸事業に従事し、桃園大圳の灌漑工事の設計及び監督を行ひて北部の食糧増産の基礎を築き、また後年、全島の近代産業建設の基盤となりし日月潭水力発電所建設の計画を策定する等数々の不朽の実績を残されたるも、取分け大偉業として歴史に御名を刻まれしは嘉南平野における嘉南大圳の建設工事の発案及び指導監督なり。

この大事業に当り、八田與一命は不眠不休の研究調査を重ね、進んで世界最先端の技術を採用駆使し、給水量一億五千万噸に及ぶ烏山頭ダムを造営して用水を蓄へ、一万軒の給水路、六千軒の排水路を縦横に張り巡らせ、併せて三年輪作給水法を導入し、嘗て洪水、旱魃、塩害に苛まれ、住民の飲料水すら欠乏せしこの不毛の大平原を遂に島内随一の穀倉地帯へと変貌せしめられたり。

この工事の完遂成功は命の卓越せる見識及び技術力は素より、台湾人同僚と実の家族の如く親しく交はり、以てその心を収攬されし高潔なる御人格に拠るものと言ふべし。そもそも工事の目的は台湾人の民生向上にこそあり、その御施策は只に土木建設のみならず、農民の近代農業技術の指導に迄及び、その結果、農民の生活文化全体の著しく向上したることは万人のひとしく認める所にして、これ八田與一命の台湾住民より神の如く敬愛されし所なり。住民は報謝の念已み難く烏山頭ダムの畔にその銅像を建立し、御偉業を顕彰せしこと世人のよく知る所なり。

八田與一命はその後なほ台湾内外の土木建設の指導に精力を傾注し、大東亜戦争の勃発に際会するや、比島開発のため第十四軍司令部所属の陸軍軍属として応召し、大洋丸にて勇躍任地に向かひしも、昭和十七年五月八日、東支那海上を航行中敵の魚雷攻撃を受け、ここに壮烈なる戦死を遂げられ給ひぬ。

この悲報を受けし嘉南の農民は銅像の傍らに命の墓を建て、爾来、毎年の御命日にはこの地において慰霊祭を執り行ひ今日に至る。

台湾においてかくの如き大貢献を果たされし八田與一命は我が日本の誇りなり。ここに八田與一命を慕ひ奉る日台両国民相集ひ、神靈のこの靖国の御社に安らかに鎮まりまさむことを祈り奉り、且つ運命共同体たる両国の共栄に御加護給はらむ事を念じ奉る。

平成十六年四月二十五日

八田與一命慰霊祭参列者一同